

# 宗教認知科学の成立史

## —多分野的複合はいかにして成し遂げられたか—

藤井 修平

### 1. 序論

#### 1-1 はじめに

「宗教認知科学 (Cognitive Science of Religion, 以下 CSR と表記)」<sup>(1)</sup>は宗教学の新たな形態として、国際的に知られるようになってきている。2006年に国際宗教認知科学会 (IACSR) が設立されたのに加え、国際宗教学宗教学会議 (IAHR) の2010年トロント大会と2015年エアフルト大会では CSR の観点からの基調講演が行われ、米国宗教学会 (AAR) の近年の大会においても CSR のパネルが複数組まれている。さらに2012年には、米国カリフォルニア州立大学に初めて CSR の講座が設置された。

CSR という新たな分野が生まれたことは、宗教学の歴史において大きな変化だといえる。そう考えるに足る理由は以下の三つが挙げられる。第一に、CSR の成立は同時発生的である。後述のように CSR は著名な研究者とその弟子からなる「学派」を中核とするものではなく、共通の関心を持った研究者の集まりから生まれたものである。第二に、CSR は分野横断的である点を特色としている。現在では宗教学者に加え、人類学者や心理学者、歴史学者や考古学者まで CSR に参加している。とりわけ数々の心理学・認知科学の研究所との共同研究が行えるようになったことが、CSR の学際性のもたらした結果の一つである<sup>(2)</sup>。第三に、CSR は一定の制度的独立を果たしたことにおいても際立っている。これまでの宗教学の歴史においては、宗教現象学であれ解釈学であれ支配的であったものは広く共有された方法論という形に留まっていた。それに対して CSR は国際学会の設立や学会誌の刊行に見られるように、単独の分野として独立することが意図されていたといえる。

こうした特徴を有する分野が生まれたことは、宗教学の歴史においても類を見ないことである。そのため CSR の成立に対して、以下のような疑問を挙げるのは有意義なことであろう。すなわち、CSR の成立にはどのような研究者が関わったのか、彼らは何に影響を受けて共通の見解を形成するに至ったのか、そして彼らはどのようにして CSR という分野を作り上げたのかという疑問である。これらの問いに答えることによって、CSR の成立の経緯を明らかにすることができるだけでなく、その背景として存在している多分野的な知的変動の把握が可能となるとともに、CSR をモデルケースとして学問領域における新分野の誕生のあり様についても理解が深まることと思われる。

#### 1-2 先行研究

CSR の成立史に関しては、当事者による記述に加えていくつかの研究が存在しているが、そのほとんどは「大きな物語」を形成するものに留まっている。久保田浩は、宗教学が学問制度化した状況から遡って描き出される「自己確認的歴史叙述」<sup>(3)</sup>は、現状に至る歴史的経緯を構築し、それによってより良い将来的方向性を指し示す戦略でもあると述べているが、CSR における歴史記述につ

いてもこのことは当てはまる。その上、久保田がその例として挙げている D・ウィーベの「現在の宗教学が依拠すべき科学性の回復」という見解を CSR はまさに用いているのである。たとえば T・トレムリンによる記述では、これまでの解釈学的・社会学的な宗教学においては「しばしばスイ・ジェネリスで、独立したものと考えられた宗教は、把握するために特別の視点が必要であり、それゆえ特別な研究方法が必要である」<sup>(4)</sup>とされ、科学的な方法論が欠如していたが、CSR はその欠点を埋めるものとして登場したと述べられている。こうした「科学性の回復」論と平行して存在するのが、認知科学の発展に伴う「認知革命」ないし「認知的転回」によって CSR が生まれたとする言説である<sup>(5)</sup>。CSR はその名の通り認知科学の影響の下に生まれたことは否定できないが、認知的転回が必然的に新分野の誕生をもたらすわけではない以上、これを CSR の成立の原因とみなすことはできない。同時に、1990 年代の宗教に関する理論には D・デネットのような認知科学者はまったく関与していないという事実も、この見解を疑わしくしている。さらには、CSR はダーウィンに端を発するという説さえあるが<sup>(6)</sup>、これもまた戦略的な自己確認の典型である。

こうした物語を提示するに留まる歴史記述に比べ、初期のものにはより具体的な成立経緯が語られている。I・ピュシアイネンの 2002 年の論文では「宗教研究における認知的アプローチはそのほとんどが 1990 年代に発展した」<sup>(7)</sup>と述べられ、この時期に D・スペルベルの影響の下で多くの研究が生まれたとされている。ここで重要な転機とみなされているのが 1990 年のローソンとボイヤーの著作の刊行である。このことは、後に 1990 年が CSR 創始の年だとされたこととも一致する。実際に 2014 年の国際宗教認知科学会の大会では、2015 年を CSR の成立から 25 周年とみなし、その歴史を検討する試みがなされた。その発表内容をまとめた論文集『宗教は説明されたのか』(*Religion Explained?*) においても、「CSR は 1940 年代から 50 年代にかけての最初の認知革命から派生した抵抗運動の一部である」<sup>(8)</sup>といった「認知革命説」が見られる一方で、当事者による初期の状況の振り返りも行われている。

このような先行研究に対して必要とされているのは、自己確認的歴史叙述に留まることのない個々の研究の影響関係の把握や、CSR 成立に至る研究者の活動の記述である。そのためには、議論の範囲を特定の年代に限定した上で、個々の出来事を時系列で整理し、より具体的な CSR の成立史の記述を試みなければならない。

### 1-3 研究目的と方法

本論では CSR の成立の過程を記述するために、CSR を生み出した複数の研究者からなる「CSR 創業者グループ」を仮定し、その理論や研究活動を明らかにするという方法をとる。研究対象が個人でないのは、CSR が目的を同じくする研究者の集まりから生まれたという事実による。ここで、「CSR 創業者グループ」を明確な研究対象として提示するためには、そこに属しているとみなせる研究者間で見解が一致し、CSR の創立という目的のために協働していたことを示す必要がある。そのために、以下では彼らの文献上での相互言及、研究大会などの活動、そして彼ら自身による証言からこれを明らかにする。これらは CSR の制度的な側面に関する記述といえるが、CSR が宗教学における新分野として提示されている以上、同時にその理論についても分析する必要がある。実際に「CSR 創業者グループ」における言説には共通点が存在し、その点において初期の CSR は一定の理論体系を有する分野だとみなしうるのである。そこで以下では、彼らの宗教についての理論を

記述するとともに、既存の理論に対する CSR の位置付けや、その定義を明らかにする。

この二つの研究目的、すなわち CSR 創業者グループの活動を明らかにすることおよびその理論の形成を記述することが達成されてはじめて、一分野としての CSR の成立史が提示されたとみなすことができる。その内容をより厳密なものとするために、以下では扱う期間を 1990 年から 2000 年代初頭に限定する。1990 年は CSR の開始された年と目されている。そして 2000 年には文献上にはじめて CSR という語が登場し、これ以後は CSR の存在が広く認知されるようになる。この限定により、CSR という語に与えられた意味を分析する際に、語が広まっていく過程で被る語義の変化を最小限に抑えることができる。また CSR という用語は造語であり、それ以前の用例が存在しないという事実もこの観点を可能にしている。

以下ではまず、CSR 創業者グループとして想定される研究者のうち、1990 年代前半から活発に研究を行い、かつその内容に多くの共通点が見られるローソンとマコーリー、ポイヤー、ホワイトハウスの宗教についての理論を分析する。その後研究者間の影響関係に基づき徐々に対象を拡大し、CSR 創業者グループの内実を明らかにするとともに、彼らによる CSR の理解と、分野としての成立に至るまでの活動を記述する。

## 2. 初期の CSR 理論：ローソンとマコーリー、ポイヤー、ホワイトハウス

### 2-1 ローソンとマコーリー

E・トーマス・ローソンは南アフリカ共和国生まれの宗教学者で、シカゴの北バプテスト神学校を経てシカゴ大学神学研究科の宗教哲学専攻に入学し、博士号を取得している。彼はシカゴではワッハ、エリアーズ、ロングの著作から学び、宗教史や宗教現象学の方法論を身に着けたが、その後西ミシガン大学<sup>9)</sup>で教えるにあたって社会学、社会生物学、人類学、言語学などに関心を移していった<sup>10)</sup>。ローソンの 1976 年の論文「言語としての儀礼」では、構造言語学の手法を儀礼に適用することが検討されている。ここでローソンが提示する儀礼の「構造分析」が示すのは、複数の二項対立の調停によって儀礼が進行していくとする弁証法的な図式である<sup>11)</sup>。

ローソンが彼の教え子ロバート・マコーリーとともに 1990 年に著した『宗教を再考する』(*Rethinking Religion*) は、現在では CSR の端緒になった著作とみなされている。同書では、「宗教儀礼の普遍原則」を中心とする儀礼理論が探究されている。その背景にあるのは、儀礼は自然言語とのアナロジーによって理解できるという考えであり、J・オースティンや E・リーチの言語学的アプローチがここでは参照されているが、多くを負っているのが N・チョムスキーの生成文法の理論である。ローソンとマコーリーは、チョムスキーが言語話者は普遍的な言語能力を有していると述べたのに対し、「話者が言語学的な文の多くの特徴に関する強固な直観を有しているのと同様に、宗教的儀礼システムへの参加者も儀礼行為の特徴についての直観的洞察を有している」<sup>12)</sup>という「儀礼能力理論」を提示する。ここに見られるのは、話者が言語を自ずから獲得できるのと同じく、儀礼の行為者は儀礼を自然に形成する能力があるというアナロジーである。彼らはこの視点を認知的アプローチと呼んでいるが、人間の有する何らかの普遍的な能力が宗教現象を生み出すという考え方は他の CSR の理論と共通している。

このような視点から、ローソンとマコーリーは儀礼に対する構造分析を行っている。そこではチョムスキーの手法を模範とし、儀礼に関わる参加者や道具などの総体が「文」に類するものとして

扱われており、言語の構造分析が文を構成素に分解するのに対し、彼らは儀礼の諸要素を分解し数式化している。同時にこの構造分析から二つの「宗教儀礼の普遍原則」が導き出される。第一のものは、すべての儀礼は「文化的に仮定された超人間的行為者」を含み、この超人間的行為者が儀礼の行為者と結びついているか、あるいは儀礼の受容者ないし行為と結びついているかによって儀礼の性質を区別する「超人間的行為者の原則」である<sup>(13)</sup>。第二のものは、文化的に仮定された超人間的行為者が儀礼の構造上より近い位置にいるほどその儀礼が重要なものとみなされるという「超人間的近接性の原則」である<sup>(14)</sup>。同書で試みられている儀礼の構造分析はあまりに複雑かつ、それによって何が説明されるかが明白ではないために、その後彼らはこの構造分析の手法をほぼ放棄し「普遍原則」のみを自らの理論として発展させることになる。同様に、他の研究者に受け入れられ CSR の基礎になったといえるのも彼らの理論ではなく、人類に普遍的儀礼能力が儀礼を生み出すという視点であり、こうした理由からローソンとマコーリーが CSR に対して果たした理論的貢献は限定的だといえる。

## 2-2 ボイヤー

ローソンとマコーリーの著作に対する書評において、『宗教を再考する』は宗教的観念と実践に関する人類学的思考の転換点を位置付ける重要な著作である<sup>(15)</sup>と彼ら进行评估しているのがパスカル・ボイヤーである。ボイヤーはフランスのパリ大学ナンテール校でダン・スペルベルに民族学を学び、その後スペルベルと同様、国立科学研究センター (CNRS) の研究講師および研究主任の地位に就いている。ボイヤーは『宗教を再考する』と同じ 1990 年に『真理と伝達としての伝統』(*Tradition as Truth and Communication*) を出版し、その後も 94 年の『宗教観念の自然性』(*The Naturalness of Religious Ideas*) から、2001 年の『神はなぜいるのか?』(*Religion Explained*) に至る一連の著作により、CSR の形成において中心的な役割を果たしている。彼の人類学者としてのフィールドはカメルーンのアング人であるが、彼らの詳細なモノグラフを記述するよりも、より理論的な側面に重点を置いている点に特徴がある。『真理と伝達としての伝統』においては人類学の研究対象を包括する際概念としての「伝統」に対する批判的検討が行われているが、ここで彼が立てるのは、伝統とみなされる「特定の顕著な形態を有する社会行為がなぜ、どのようにして反復されるのか」<sup>(16)</sup>という問いである。この問いに対してボイヤーは、伝統が反復されるのは単に人々が保守的だからではなく、それは記憶のプロセスと関連しているからだと答える。すなわち、人間の記憶の構築においては記憶されやすいものとされづらいものが存在するという主張である。さらに、信念についても「何が特定の非日常的信念を他より顕著にし、より記憶されやすくするのか」<sup>(17)</sup>という問いを立て、これに対しても記憶が重要な役割を果たすと述べる。ここで示されているのはローソンらと同様、人間の能力である記憶が特定の信念を形成しやすくしているという見解であるが、ボイヤーはそこからさらに進んで、そうした人間の能力は普遍的であるゆえに世界中で類似した信念体系として繰り返し出現するという主張を行っている。これは CSR でしばしば言及される「反復される通文化的パターン」の原型となる見解である。続く著作『宗教観念の自然性』においては、この見解がより明示的に扱われている。ボイヤーは本書の冒頭で、「まったく異なった文化的環境で見出される宗教的表象には、重要な反復する特徴があることが観察される」<sup>(18)</sup>と述べ、人類学の課題はなぜ特定の特徴が広まるのかを説明することだとする。そうした共通パター

ンが生まれる原因としてポイヤーが想定するのが、人間の精神の共通性と、それがもたらす制限である。彼は「宗教」などを実体的な普遍物として探究することはできないが、人の心が共通性を持つならばその認知的制限によって「宗教」とみなされるものをも含む普遍的な現象が生まれうるとする。

こうした観点から宗教を見る際に、ポイヤーが導入したのが「反直観的 counterintuitive」という概念である。従来の認知科学では人間の思考様式を素早く無意識的で、普遍的な「直観的 intuitive」思考と、慎重で意識的かつ個別的な「反省的 reflective」思考に区分しており、そのうち直観的思考には対象の分類や生物とは何かの定義などが含まれ、人類共通の認知的制限が反映されるとみなされていた。しかし重要なことに、ポイヤー以前は宗教は反省的思考の産物とされ、それゆえ認知科学的に扱えないものとされていたのである<sup>(19)</sup>。こうした状況において、ポイヤーは直観的でも反省的でもない「反直観的」という概念を創出し、宗教を認知的制限の対象に含めることに成功した。『宗教観念の自然性』では、反直観性の概念はまだ萌芽的段階にあり、「宗教的表象は典型的に、その環境で通常起こることについての人々の観念を裏切る主張を含んでいる」<sup>(20)</sup>という見解は見られるが、反直観性は直観的なものに対立する「非直観性」として扱われている。この段階のポイヤーの見解は、推論されやすいが人々の注意を引かない常識的事項である直観的な要素と、推論されづらいが注意を引く非常識的事項である反直観的な要素をバランスよく含んだ「認知的最適物 cognitive optimum」が宗教的観念であるというものであった。同年のポイヤーの論文では、「宗教的概念は、もしその重要な背景となっている直観的原則に直観的仮定が従っていなかったら獲得されず、表象されずらしいだろう。同時に、もしそれが直観的予測からは生まれえないような原則を含んでいなかったら、まったく興味の対象にならないだろう」<sup>(21)</sup>と述べられている。彼は反直観的なもののみで構成されている概念の例として、全能ではあるが心を持たない神を挙げ、このような神は人との関係を持つことができないとしている。

このように、初期のポイヤーの考えでは宗教的観念は直観的なものと反直観的なものの複合だとされていたが、後にこの反直観的なものこそが宗教的観念の特徴だとみなされるようになる。とりわけこの見解を推し進めたのは宗教学者ピュシアイネンであり、彼は1999年の論文で「反直観性はまさにあらゆる宗教とそれ以外の現象を指す最小限の共通要素である」<sup>(22)</sup>と述べ、反直観性が宗教的概念の必要条件であるとする議論を行っている。これを受けてポイヤーも、宗教とみなされる「反復する通文化的パターン」を反直観性がいかに生むかという論を進めるようになる。そのために彼がとった方策は、反直観的な概念がそうでない概念に比べ記憶されやすいことを心理学的な実験によって示すことであった。その内容は後述するが、ポイヤーの行った宗教の発生の因果的説明とは、反直観的概念が記憶されやすいのであればそれは世界中に広まり、その一部が宗教的概念として各地で見出されるであろうというものである。『神はなぜいるのか?』では、こうしたCSRの基礎的見解が形になっている。

一連のポイヤーの研究においては、宗教的概念を複合的かつ複雑なものから、簡素なものへと単純化していく過程が進行していたといえる。これは実質上、何を「宗教」とみなすかが絞り込まれていったということであるが、その結果としてポイヤーの議論は長所と短所を同時に備えることになった。その長所は、宗教の概念を実験的手法で扱えるようになったことである。そして短所は、現実には宗教だとされるものと、CSRが宗教とみなしているものとの乖離が指摘されるようになって

たことである<sup>(23)</sup>。

### 2-3 ホワイトハウス

ハーヴィー・ホワイトハウスはロンドン経済学院でM・ブロックに社会人類学を学び、その後ケンブリッジ大学キングズカレッジで1990年に博士号を取得し、95年に『儀式の内側』(*Inside the Cult*)を、2000年に『論議と図像』(*Arguments and Icons*)を、2004年に『宗教性の二様態』(*Modes of Religiosity*)を刊行し、宗教研究と認知科学を結びつける役割を果たした。彼の人類学者としてのフィールドはパプアニューギニアであり、『儀式の内側』は同地での調査結果を記したモノグラフである。同書は彼の調査したニューブリテン島のポミオ人の社会的背景や文化、宗教的儀礼について詳述しているが、その際に用いた説明の枠組みのために、CSRの初期の著作に数え入れられている。彼は同地で、二種類の儀礼を目撃した。第一のものは「ポミオ・キヴング」と呼ばれている土着の信仰とキリスト教の千年王国思想が複合したものであり、定められた規則を守って生活すれば、祖先が帰還し新たな安定した政治体制が築かれるという信仰を中心としている。これに対し、第二のものはポミオ・キヴングから生まれた分派で、指導者の幻視を基に、神に選ばれた人々が集まって儀礼を行えば、祖先が現れ多くの財をもたらしてくれるとするより急進的な運動であった。ホワイトハウスはこの二種類の儀礼を記述した後に、それを人間の持つ記憶プロセスと関連した「宗教性の二様態」理論で説明を行った。彼の主張は、認知心理学で用いられる「意味記憶」、「エピソード記憶」という異なる過程によって記憶された出来事がそれぞれ「教義的様態」、「想像的様態」という二つの理念型を形作ると考えることができ、それが実際の現象となって現れるというものである。ホワイトハウスによれば、教義的様態では言語化された教義と釈義が意味記憶を通して記憶され、想像的様態では図像的イメージがエピソード記憶を通して記憶される。意味記憶は言語による繰り返しによって記憶されるものであり、エピソード記憶は強烈な体験が感情を伴って記憶される。ゆえに教義的様態は知的で統一的、反復的という特徴を持ち、想像的様態は感情的で多様、散発的という特徴を持つ<sup>(24)</sup>。この二類型を、彼は自らの提示した対象に適用する。すなわち、ポミオ・キヴングの主流派は教義的様態の、分派は想像的様態の典型例であると述べられている。

『論議と図像』においては、ホワイトハウスはこの「宗教性の二様態」理論のさらなる拡大を行っている。この理論はボイヤーと似て特定の観念の記憶と伝達に着目するものであるが、彼がそれらを重視する理由は「多くの人が文字を持たないニューブリテンや、一部しか読み書きのできないマヌスでは、伝統的な宗教イデオロギーの頻繁な反復が記憶の喪失と歪みの問題に対する第一の解決策」<sup>(25)</sup>だからである。そのため、こうした無文字社会では反復による記憶か、忘れる心配のないエピソード記憶が文化の形成を支えていると彼は主張する。加えてキリスト教においても中世の修道院や宗教改革期に二種類の様態が見られると述べられ、さらにはこの理論が世界中の人類学的事例に適用できることが示唆されている。

ホワイトハウスの理論の構造は、認知心理学における意味記憶、エピソード記憶の区別が二種類の宗教の様態を生み出すというものである。彼はこの理論の一般化を望み、多くの研究者による検討を受ける機会に恵まれたが、CSRの支持者からの反応も、そうでない研究者からの反応も概ね批判的なものであった。例として、ボイヤーには好意的であったピュシアイネンは、二様態理論は宗教をうまく定義できていないとして批判している<sup>(26)</sup>。そのため、ホワイトハウスの理論はその後

CSR においても主流の地位を得るには至らなかった。

以上が、CSR の端緒とみなしうる 1990 年代におけるローソンとマコーリー、ボイヤー、ホワイトハウスの宗教と儀礼についての理論の概要である。これらの記述からすでに、彼らが「認知的」という語で表現される新たな手法や視点から、宗教を統一的に扱うための理論を提示していたことは明らかであるが、彼らの一致はその理論に留まるものではない。次に、CSR 創立者グループの共通性をより明確にするために他分野との関係という点に目を向け、彼らの人類学と心理学への関わりについて分析する。

### 3. 初期の CSR 理論の共通点：人類学、心理学および認知科学

#### 3-1 人類学における認知科学の受容と CSR への影響

1990 年代に CSR の成立に関わった人物は、人類学的知見に影響を受けているという共通点を有している。ボイヤーとホワイトハウスは人類学者であったほか、ローソンもまた人類学理論から多くの示唆を得ており、このことは CSR の成立に人類学が大きな役割を果たしたことを意味している。そのため以下では、CSR の成立に先行して存在していた人類学者の認知科学への関与について記述する。

ここで言及するものはとりわけパリ大学ナンテール校の民族学とロンドン経済学院の社会人類学で、両大学にはそれぞれダン・スペルベルとモーリス・ブロックがおり、ボイヤーとホワイトハウスは彼らに教えを受けていた。スペルベルはエチオピアをフィールドとする人類学者だが、語用論の一つである「関連性理論」を提示した言語学者としても知られている。彼は 1984 年のロンドン経済学院におけるマリノフスキー記念講演で人類学にとっての認知科学の重要性を説いている。スペルベルは、文化的表象の少なくとも一部は、普遍的な心的傾向によって説明されるべきとする。その方法として提示するのが、「表象の疫学」である。これは表象の伝播を病気の広まりにたとえ、それがなぜ伝播するのかについて因果的説明を試みるものである。スペルベルの疫学は、文化的表象の伝播の過程に着目する点において R・ドーキンスのミーム理論などの文化進化論と共通点を有しているが、彼は文化的表象はミーム理論が想定する模倣によってではなく、特定の「誘引子」のもたらす影響によって広まるとしている。この誘引子とみなされるのが、認知科学において主張される心的傾向と、社会形態などの生態学的要因である。彼によると「石炭は黒い」といった直観的信念は、それが人間の心的能力に由来するがゆえに広範囲に広まるという。それに対して、「すべての人間は生まれつき平等である」といった反省的信念は、心的要因によってではなく生態学的要因によって広まったとされている。スペルベルの表象の疫学は、これまでに挙げた CSR の創立者すべてに大きな影響を及ぼしている。ローソンとマコーリー、ボイヤー、ホワイトハウスはみな彼について言及している上に、とりわけスペルベルの「文化的表象を説明するということは、なぜある種の表象は広範囲に共有されるのか、その理由を説明することにほかならない」<sup>(27)</sup>という主張は、前述のボイヤーの方法論の基礎となっている。

スペルベルと同様に、認知科学的方法の導入を推進した人類学者として知られているのがブロックである。ブロックはそれまでマルクスおよびデュルケム的方法論を用いていたが、1990 年のリバプール大学におけるフレイザー講演で認知科学の重要性を強調した。同講演を基にした論文では、「人類学者の学習や記憶、検索の理論が認知科学者のそれとこれまでいかに相容れなかったかは明

白である。[……]しかし状況は変化してきている」<sup>(28)</sup>として、文化の記述において言語を重視する従来の見方を批判し、認知科学の提供する人間の非言語的な側面についての知見を参照すべきだとしている。ホワイトハウスらはブロックのこの姿勢について、「(認知科学に好意的な者もそうでない者も、多くの研究者がみなしているような)彼の『転向』は、とりわけ英国において大いに関心を集めた」<sup>(29)</sup>と述べている。

こうしてロンドン経済学院を中心とする人類学者の間では、宗教学よりも早い時期からの認知科学の受け入れが進んでいたといえるが、このことは決して CSR がこうした人類学の一部ないし「スペルベル学派」として発展してきたことを意味するものではない。というのもこれらの人類学者と CSR の研究者、とりわけスペルベルとボイヤーの間には、ある重要な点において差異が存在するからである。それは、宗教に対する両者の見方に顕著に表れている。ボイヤーは前述の通り直観的思考から自動的に派生する反直観的思考から宗教的概念が生まれるとみなしているが、他方でスペルベルは「宗教的信念や他の文化的神秘を、ある種の普遍的な心理学的性向の視点から説明しようという試みは、いまだに説得力をもっていない」<sup>(30)</sup>と述べている。同様に神話についても、「神話とは口頭で伝達される物語であって、直観的信念とは相容れない『超自然的』現象を含むにもかかわらず、現実の出来事を描くものと解されている。したがって、不整合性を犯すことなしに神話を受け入れるためには、それを直観的信念から隔離しなくてはならない。すなわち、神話は反省的信念として抱かれなくてはならない」<sup>(31)</sup>と述べられている。スペルベルは神話を心的性向にではなく文化的背景に強く影響される反省的信念とみなしており、この点においてボイヤーとは見解を異にしている。スペルベルにとっての直観的信念は「物体の運動、自分の身体の振舞い、身体と環境のさまざまな相互作用の効果、多くの生物種の振舞い、他人の振舞い」<sup>(32)</sup>等、人間にとってより基礎的な事項のみが含まれるカテゴリーである。このようなスペルベルの見解からは、宗教的信念を心的性向の観点から扱うという CSR の姿勢は生まれえない。換言すれば、反直観的信念を経由し、宗教的信念の位置を反省の側から直観の側に移すことで心的性向による扱いを可能とした点がボイヤーのもたらした理論上の変化であり、この点において CSR はスペルベルの見解とは異なっている。

以後の変遷が異なるとしても、初期の CSR 理論がスペルベルの表象の疫学および英国人類学における認知科学的視点に影響を受けていたことは疑いない。同様に CSR の成立に影響を及ぼした見解としては E・O・ウィルソンの社会生物学が挙げられるが、これについては別の箇所で詳述したため<sup>(33)</sup>、本論での言及は避ける。

### 3-2 心理学的実験の実施

初期の CSR の創立者はまた、心理学の手法を取り入れた点においても共通性を有している。彼らの言説には「この理論は少なくとも四つのテスト可能な含意を有している」<sup>(34)</sup>、「本書は宗教がいかに創られ、再生産され、変容するかに関するテスト可能な理論を提示する」<sup>(35)</sup>といったように、自らの理論が「テスト可能 testable」だという見解が一貫して見られる。これは、その理論が何らかの仮説を生み、その仮説が正しいかどうかを経験的にテストすることができるということを意味している。彼らは実際にそのような経験的テストを実施したが、その際には心理学の手法をすでに学んでいる人物の助けが必要であった。そのような人物として目されるのが、心理学者ジャスティン・バレットである。彼も同様に「新たな認知科学的宗教理論の多くが持つ斬新な特徴の一つは、



それらの理論が経験的に支持ないし反証されうるテスト可能な仮説を提供することである」<sup>(36)</sup>と述べ、実際にホワイトハウスの理論がいかに経験的にテストしうるか検討している。

ローソンはバレットと共著の 2001 年の論文において、自らの複雑な理論体系を相当程度にまで簡略化し、「任意の儀礼体系に関する知識がほとんどない人々も、その構造についての最小限の情報が与えられた儀礼の潜在的な効果に対して、直観を有している」、「活動構造における超自然的行為の表象は、儀礼の効果に関する最も重要な要因だとみなされる」、「適切な志向的行為者にその活動を行わせることが、他の活動よりも相対的に重要だとみなされる」<sup>(37)</sup>という予測を作り上げ、この予測をテストするために二つの実験を行った。実験 1 を例にとると、「特別な人物<sup>(38)</sup>が日常的な塵を大地に吹き付けると、その地にはよい作物が実った」などの架空の儀礼に関する文章を複数読ませ、そのことがいかにありそうかどうかを参加者に七段階で評価させるという手続きにより行われている。これは二番目と三番目の予測を実証する実験であり、「日常的」の代わりに「特別な」の語が与えられた行為者や道具を含む文が効果的とみなされれば予測は正しかったことになるが、予測の通りに両者の間には統計的な有意差<sup>(39)</sup>が見られた。この結果により、これら三つの予測は正しかったと結論付けられている。

ポイヤーも同じく 2001 年の論文で、自説を実験によって検証している。彼の立てる仮説は、存在論的カテゴリーに対する予測を裏切る反直観的概念は、そうでない概念に比べて記憶されやすく、それゆえ広範囲に広まり存続しやすいというものである。この仮説をテストするために、彼は五つの実験を行った。どの実験も形式は共通しているが、実験 1 では存在論的カテゴリーの違反を含んだ十二の記述と、同数の違反を含まない記述が登場する文章を参加者に読ませ、その後思い出せるものを書かせるという手続きである。実験の結果は、仮説の通り違反を含む記述がそうでない記述よりも有意に想起されやすいというものであった。そのため、「この結果は裏切り（ある領域の妥当な予測の違反か、ある領域の別の領域への移し替え）が情報検索の際に優位を生むという仮説を支持する」<sup>(40)</sup>と結論付けられている。ポイヤーは同様の実験をフランス、ガボン、ネパールの参加者に対して行い、類似した結果が得られたことから、「想起の結果はこの材料に対する想起の傾向が文化を通して安定していることを示している」<sup>(41)</sup>としている。

同じくホワイトハウスも、自らの理論を検証する実験を行っている。彼は「宗教性の二様態」理論から、想像的様態に分類される感情的な宗教体験においてはその体験の意味を解釈する「自発的積義内省」が起りやすいという主張に着目し、「儀礼行為の最中の感情の高まりの水準は、積義的思考の多寡や構造的深さと直接的に相関する」<sup>(42)</sup>という仮説を立て、この積義的思考を尺度として用いている。二つ行われたうちの第二の実験では、参加者は二つのグループに分けられ、それぞれ強く感情的な儀礼と感情的でない儀礼を指示された通りに実行する。どちらの儀礼においても、祭壇のある部屋で手を油に浸すなどの前準備の後で、参加者は呪文を唱えるよう指示され、箱から石を取り出し、それに泥を塗って箱に戻すという行為を行う。二つのグループの違いは、「感情的」グループでは赤い照明が用いられていることおよび、儀礼中に流される音楽や太鼓の音量が大きいことである。儀礼の実施後に、参加者への質問や電氣的皮膚反応の測定によって、設定通りに「感情的」儀礼の参加者のほうが感情が高められたことが確認された。その後時間において、参加者に自らが行った儀礼についてのインタビューを実施し、その回答から儀礼の意味を解釈する言葉の数を得点化し、自発的積義内省の度合いを計量した。その結果「感情的」グループのほうがそうでない

グループよりも、緩い基準で有意<sup>(43)</sup>に自発的積義内省の点数が高かった。これにより、予測の通りに「儀礼に対してより強い感情的反応を示した参加者は、より意味の積義を行う過程に携わりやすい」<sup>(44)</sup>という結論が得られた。

このように、ローソン、ボイヤー、ホワイトハウスの三者とも自らの理論の心理学的実験による実証を試みているが、そこでは人類学的ないし宗教学的主張を実験的方法に適合させる試みが行われているといえる。実験の際に重要となるものは、「仮説」、「手続き」、「尺度」の三つである。このうち仮説については、それぞれが提示する理論をある程度単純化して「A に対して B は、C という尺度において差が見られる」という形式に作り替えている。例としてボイヤーの仮説は「反直観的でない概念に対して反直観的な概念は、記憶されやすさという尺度において差が見られる」という形態をとっている。A と B の差を示すのに必要なのが尺度であって、これは何らかの数量化が可能な評価基準である。それぞれローソンは儀礼が成功しうるかについての参加者の評価、ボイヤーは想起された記述の数、ホワイトハウスは儀礼の意味を解釈する言葉の数を尺度として用いている。結果の数量化が行えれば、「差が見られる」かどうかは心理学において標準的な統計的手法によって判断することができ、そこで有意差が得られれば心理学的基準を満たしているといえる。ただし、有意差が直ちに仮説の信頼性に繋がるわけではなく、他の要因の影響を排除できているかどうかなどが検討される必要がある。その際に工夫が必要なのが実験の手続きであって、ローソンは架空の儀礼に関する文章の評価を、ボイヤーは反直観的記述を含んだ文章の想起課題を、ホワイトハウスは二種類の儀礼を実践した参加者へのインタビューを手続きとして採用したのであるが、こうした手続きには批判的検討の余地がある。それでも、宗教学者と人類学者が心理学の手順を踏んだ実験を行い、一定の成果を示したことは他には見られないことであり、このことが後の CSR における心理学的手法の導入を活発化させ、宗教学と心理学を結びつけるきっかけとなったことは疑いがない。

### 3-3 CSR の概念の確立

このように、ローソンとマコーリー、ボイヤー、ホワイトハウスは英国の人類学における認知科学との結びつきに影響を受け、自説を提示した後に、心理学的手法によって実証を行った。こうした一連の試みが終わると同時期に、彼らは自らの研究内容を新たな分野として提唱するようになった。以下では、2000 年初頭の CSR の語がはじめて言及された段階において、それがどのようなものとして CSR 創立者グループに理解されていたのかを明らかにするために、四者の理論がいかに「認知的」なのか、あるいは CSR のいかなる点が新しいのかという側面に着目して分析を行う。

「認知的」という語は彼らが頻繁に用いているが、その意味は必ずしも明瞭ではない。一般的な認知科学の見地からは、この語は「思考に関する」といった意味で用いられているといえるが、彼らの用法はこれよりも限定的である。ローソンとマコーリーは『宗教を再考する』において自らを「認知主義者 *cognitivist*」と呼んでいるが、その語義は R・ホートンなどの主知主義、V・ターナーなどの象徴主義、C・レヴィ＝ストロースの構造主義を受け継ぎつつ、「ここ数十年の言語学、認知心理学、認知人類学、心理学の哲学を含む新たな認知科学の発展から示唆を受けている」<sup>(45)</sup>というものである。他方でボイヤーは「認知的制限」の概念を重視するが、「認知的制限は人間の心と脳の普遍的特徴であり、心は特定の概念の獲得、記憶、伝達の可能性に直接的な影響を及ぼす」<sup>(46)</sup>と説明されている。すなわち、ここでの「認知的」は心理学で主張されるような人間の心の普遍的傾

向性に関するものを意味していると理解できる。ホワイトハウスの場合、自らの理論の新規性とみなしているものは明確である。彼は「宗教性の二様態」理論を提示する際に、人類学ではこれまでも R・ベネディクトのものやターナーのものなど同様の二分法は数多く考案されてきたと述べるが、それらに比べて「私の教義的・想像的様態の理論は以下の二つの点で際立っている。第一に、既存のどの議論よりも、すでに認識されている変数の範囲が幅広い。第二に、私の理論はこれらの変数を、はじめて認知心理学の近年の発見と結びつけている」<sup>(47)</sup>としている。すなわち、認知心理学の成果を援用している点が既存理論に比べての新規性だとホワイトハウスはみなしている。

また、彼らの理論の新規性に関する言説においては、CSR は「科学的」とであるという主張がたびたび見られるが、この語には複数の意味が与えられていると考えられる。前述のような自らの理論が自然科学的な見地に依拠しているということに加え、「(論理経験主義に影響された) 科学的思想家は、解釈的アプローチを過度に主観的かつ個人的であり、基礎のない思弁であり、研究をその真の目的すなわち人間の振る舞いの法則的・因果的説明から遠ざけるものとみなしている」<sup>(48)</sup>という主張からは、科学は一般的かつ因果的な説明を行うものということが読み取れる。また「諸理論が説明しようとする現象の必要条件の候補を確証する過程においては、科学的諸理論を経験的にテストすることが重要である」<sup>(49)</sup>という見解では、科学的という語と「テスト可能」の概念が結びついているが、彼らが理論のテスト可能性を重視し実際に実験を行ったことは前節で述べた通りである。

以上の分析を踏まえると、1990年代における彼らの言説が CSR の共通点ないし新規性だと理解しているものとして、三つの要素を挙げることができる。第一の要素は「認知科学・認知心理学の見地に依拠している」というものである。これは、ローソンとマコーリーであればチョムスキーの生成文法論、ボイヤーであれば直観的思考の普遍性、ホワイトハウスであれば意味記憶とエピソード記憶についての知見がそれに該当する。第二の要素は、彼らの理論の「テスト可能性」である。第三に、CSR は何らかの一般法則、とりわけ人類に普遍的な心的傾向性から宗教現象の説明を行うものであるとされている。

彼らの理論の内容から CSR の概念を帰納することに加え、CSR の創立者が同分野について述べた最初期の記述を参照しよう。この語がはじめて見られるのは 2000 年のバレットとローソンそれぞれの論文<sup>(50)</sup>、2001 年のピュシアイネンの著作<sup>(51)</sup>と J・アンドレセンの論文<sup>(52)</sup>であるが、このように短い時期に CSR の語が急速に用いられるようになったことも、CSR の提唱が前もって計画されていたことを示している。このうち、バレットとローソン、ピュシアイネンは自らの手法を CSR だと呼んでいるのみで具体的な定義は述べていないが、彼らに加えボイヤーやホワイトハウス、S・ガスリーが CSR の研究者に該当することがここから明らかになる。他方でアンドレセンの定義では、CSR は「さまざまな心の科学の発見に依拠する科学的・説明的試み」<sup>(53)</sup>だと述べられているが、この定義は上述の第一と第二の要素を含んでいる。

以上の分析により、CSR はその設立当初にはどのようなものとしてみなされていたのかが理解できるであろう。CSR 創立者グループにとって、初期の CSR は「認知科学・認知心理学に依拠し、それらのもたらす心的傾向性についての見地から宗教についてのテスト可能な理論を提示し、経験的な手法でその理論の実証を行う分野」であった。では、このような理論的要素を有する CSR は、いかにして宗教学の新たな分野として提示されるに至ったのか。以下ではその点に関して、研究者の活動および宗教学における CSR の位置付けの側面から、CSR の成立過程について考察する。

#### 4. 一分野としての CSR の成立過程

##### 4-1 CSR 成立に向けた研究者の活動

1990 年代にローソンとマコーリー、ボイヤー、ホワイトハウスは相次いで認知的な観点からの宗教に関する理論を提示し、それが CSR の成立に至ることとなったが、これらの類似した理論は決して個別的に考案されたわけではない。むしろ彼らは、新たな分野の成立を目指して積極的に情報交換をしていたことが明らかとなっている。以下では、CSR 創業者グループが同分野の成立に向けて協働していたことを示すために、CSR 成立までの過程を研究者間のやり取りと出来事の観点から明らかにする。

CSR の成立の際の研究者間の協力について、現在ではいくつかの証言が残されている。ピュシアイネンによると、「1997 年の夏、E・トーマス・ローソン、パスカル・ボイヤー、ヴェイッコ・アントネンと私はフィンランド式サウナに入った後、宗教と認知および文化的文脈に関する小規模のワークショップを開催する可能性について話し合った」<sup>(54)</sup>。その計画は 1999 年にトゥルク大学で実現したが、同時期に米国でも企画がなされており、1998 年にバーモント大学で *Cognitive Science and the Study of Religious Experience* というワークショップが開催された<sup>(55)</sup>。同様に 90 年代末から 2000 年代初頭にかけて、数多くの研究大会が開催されている。2001 年にはケンブリッジ大学で *A Comparative Anthropology of Religion*、2002 年には再度バーモント大学で *Archaeology, History, and Cognition*、2003 年にはエモリー大学で *Psychological and Cognitive Foundations of Religiosity* が開催された。その他、オーフス大学では 2002 年から二年間のプロジェクト *Religious Narrative, Cognition and Culture* が実施され、その後も継続して研究が続けられている。またヘルシンキ大学では 2002 年にワークショップ *Approaches in Comparative Religion Reconsidered* が開催され、宗教現象学と CSR、批判理論についてそれぞれ議論されている。これらの大会の開催地からわかるように、この時期の CSR は地理的には米国、英国、フィンランド、デンマークの 4 ヶ国で進められており、そこでの中心人物はそれぞれ L・マーティン、ホワイトハウス、ピュシアイネン、A・ギアツである。

ホワイトハウスは当時の状況について後に振り返っている。彼はロンドン経済学院の社会人類学において支配的であった文化相対主義に共感できず、「相対主義のドグマに対する私の個人的な懷疑は人類の心的統一性の何らかの証拠の探究へと私を向かわせた。私は自分の育った社会とできる限り文化的に隔絶され、歴史的に切り離された場所へ行きたいと望んだ」<sup>(56)</sup>。こうして彼はパプアニューギニアの調査を始めるが、その意図は、文化的・歴史的に切り離された場所でもなお見出される共通の現象を論じることにより、人類に普遍的な心的構造を明らかにするというものであった。その後ホワイトハウスは 1990 年からケンブリッジ大学のリサーチフェローを務めていたボイヤーと出会い、彼を通してローソン、マコーリー、バレットを紹介された。「当時の典型的な宗教の研究手法に対してわれわれがみな不満を抱いていただけでなく、いかにその状況を改善すべきかについてきわめて一致した考えを持っていたことに私は驚き、感激した。われわれのグループの会合が頻繁になるにつれて、われわれは宗教研究を改革し、それに真の科学的足場を据えるための『認知主義の陰謀』を企てていると冗談めかして言うようになった」<sup>(57)</sup>。すなわち彼らは文化相対主義への不満と、認知科学に依拠した宗教理論の構築という点で意見が一致しており、協力して新たな分野を立ち上げようと画策していたのである。その参加者の一人であるバレットも同様の経過を語つ

ている。彼は米国のカルヴァン大学で認知心理学と組織神学を学び、その後コーネル大学に進学した際にボイヤーを紹介され、ローソンやマコーリー、ホワイトハウスらとも交流を持つようになった。彼は「数ヶ月にもわたる電子メールでのやり取りによって、われわれはアイデアの草案や『認知の陰謀』への熱意、巢立ちつつあるわれわれの新領域についての懸案事項を共有した」<sup>(58)</sup>としていいる。ここで言及されている「認知主義の陰謀」の集まりが、本論文で述べてきた CSR 創立者グループと一致することは明らかであろう。

こうしてバレットの 2000 年の論文でバレット、ボイヤー、ホワイトハウス、ローソンのそれまでの見解を統合し、同時に CSR の名称が宣言されるに至ったが、この年を画期として CSR は一分野として形をとり始めるようになる。翌 2001 年にはローソンとボイヤーによって学術雑誌 *Journal of Cognition and Culture* が創刊され、他の心理学者とともに彼らの論文が掲載されるようになった。2005 年にはボイヤーが CSR の共通見解を要約した「宗教的思考と振る舞いの標準モデル」を提示しており<sup>(59)</sup>、その翌年には国際宗教認知科学会が設立されている。

#### 4-2 宗教学における CSR の位置付けの試み：ピュシアイネンとマーティン

最後に、CSR が既存の宗教研究にいかにか統合されたのかについて明らかにしたい。前述のように CSR は人類学の分野に留まらず包括的に宗教を研究することを意図していたが、それが可能となるためには宗教学の領域における先行する議論を踏まえ、自らの立ち位置を確立しなければならなかった。以下では、その過程を推し進めたピュシアイネンとマーティンの議論について検討する。

イルッカ・ピュシアイネンはヘルシンキ大学で比較宗教学と宗教哲学を学び、初期インド仏教の神秘主義的傾向に関する博士論文を著した人物である。彼は前述の「認知主義の陰謀」グループの参加者として名が挙げられており、研究大会にも初期から参加している。他の研究者が自説を展開したのに対し、ピュシアイネンは 1990 年代には CSR が既存の研究とどのような関係にあるかを整理している。彼は R・マッカチオンを援用し、「比較宗教学者は、科学的な宗教理論を有していない。『宗教』の語に関して無数の定義が競合している上に、存在するものは宗教の素朴理論にすぎない。それらのいくつかは、宗教のスイ・ジェネリスな性質についての超越的な仮定を含んでいる」<sup>(60)</sup>と述べている。すなわち、エリアーデなどの「スイ・ジェネリスな」理論に対し、CSR の「ナチュラリズム的」理論は超自然的な仮定がなく科学的であるという主張であり、こうした CSR の位置付けはその後もたびたび繰り返されることになる。他方でピュシアイネンは CSR の理論を宗教学の理論の一つとして組み入れることにも気を配っており、「フィンランド比較宗教学の伝統の大部分は、認知科学のもたらす洞察と調和させることが可能である」<sup>(61)</sup>としている。その例として、2004 年の著作ではこれまでで宗教学で行われてきた奇跡や呪術、フォークロアの研究を概観しながら、それらに対して CSR がいかに寄与できるかを論じている。同様に宗教現象学についても、「宗教的な形式と構造の通文化的科学という旧来の宗教現象学理念は、宗教認知科学の形態で実現が可能である」<sup>(62)</sup>としている。

北欧におけるピュシアイネンの活動と並行して、米国ではバレットに加えルーサー・マーティンがとりわけ CSR に関心を示していた。マーティンが所属していたバーモント大学では「世俗的」研究を旨としており、彼はローソンと同様エリアーデの影響を受けて聖書研究から比較宗教学に進んだが、その後フーコーやユングを経由して、1980 年代には自然科学的方法へ関心を移すことになっ

た<sup>(63)</sup>。マーティンは 1998 年と 2002 年のバーモント大学における研究大会の開催に関わっただけではなく、2010 年の IAHR トロント大会でプログラム委員長を務めており、その結果同大会では CSR に関する発表が多数組み込まれることとなった。理論的な側面を見るならば、マーティンの関心は一貫して比較にあり、2000 年の論文では M・ミュラー、エリアーデ、そして CSR という流れで比較論の系譜を記述している。彼はエリアーデの問題点は超自然的な仮定を有する「神学的」要素だとし、それに対し CSR に代表される「ナチュラリズム的諸理論は、形而上学的・神学的仮定なしに啓蒙主義的な人類の普遍要素についての主張を再度取り上げる」<sup>(64)</sup>ことができると述べている。ここではミュラーの比較宗教学は「科学的」であったと述べられ、CSR を取り入れることは 19 世紀の理想を実現することだとされている。マーティンのこの姿勢は、先行する D・ウィーベの見解を踏まえたものである。ウィーベの 1984 年の AAR での発表を基にした論文「学術的宗教研究における度胸の欠如」における主張によると、1960 年の IAHR での R・ツヴィ・ヴェルブロウスキーの宣言に見られるように宗教学は元来科学的分野となることを目指していたが、近年では「その研究は隠れた神学的方針に支配されてしまい、現在も依然としてそうである」<sup>(65)</sup>。ここでウィーベが呼びかけるのは、草創期の理念に立ち返り、科学的宗教研究へと再び舵を切ることである。こうした意図に基づき、マーティンとウィーベ、ローソンは 1985 年に北米宗教学会 (NAASR) を立ち上げた。宗教の学術的研究の裏に「隠れた神学的方針」が潜んでいるという視点はとりわけマッカチオンが受け継いだ。彼が向かったのは科学的理論ではなく、政治的・社会的な批判理論であった。マッカチオンのこの姿勢は NAASR の基調をなすものとなったが、マーティンらはこの方向性を自らの元来の意図から逸脱しているものとみなし、それへの抗議として国際宗教認知科学会を創立したと語られている<sup>(66)</sup>。

このように、1990 年代の CSR の成立期にはこれまでに挙げた人物に加えピュシアイネンとマーティンという二人の宗教学者が関わっていた。両者は CSR に関する研究大会の開催に寄与しただけではなく、CSR と既存の宗教学的言説を接続し、宗教学における CSR の位置付けを行うという役割を果たした。その位置付けとは、換言すればエリアーデ的な宗教学が「スイ・ジェネリス」であり神学的であるという批判を踏まえた、その欠点を克服した「科学的」宗教理論としての CSR の提示である。マッカチオンのような批判理論からすると CSR もまた「スイ・ジェネリス」であるという指摘もなされているように<sup>(67)</sup>、このような位置付けには異論もあるが、これによって CSR は宗教学の内側に足場を築くことができたといえるだろう。

## 5. 結論

本論文では宗教認知科学の成立の過程を明らかにするために、「CSR 創立者グループ」を仮定し、1990 年代から 2000 年代初頭にかけて彼らがいかに理論を提示し、また CSR の成立のために活動してきたかを分析した。以下では結論として、本論で描写した CSR 成立史を概括したい。

宗教研究における認知科学的・心理学的視点の重要性に最初に着目したのはローソンとマコーリー、ボイヤー、ホワイトハウスである。彼らは人類学におけるスペルベルの「表象の疫学」の影響の下、1990 年頃に認知科学的見地に依拠した理論を提唱した後に、「CSR 創立者グループ」を形成して相互にやり取りを重ねた。彼らは自説を経験的にテストするためにバレットらの協力を得て心理学的実験を行い、一定の成果を得た。こうした試みにピュシアイネンとマーティンも着目し、90

年代後半には各地で活発に研究大会が開かれた。その成果を基に 2000 年に CSR の名が提唱され、学術領域においてその存在が示されることになったが、その際に彼らが理解していた CSR とは「認知科学・認知心理学に依拠し、それらのもたらす心的傾向性についての見地から宗教についてのテスト可能な理論を提示し、経験的な手法でその理論の実証を行う分野」であった。CSR は宗教学においては「神学的」研究批判の文脈に位置付けられ、それに対する「科学的」理論として提示されている。

CSR はこのような形で提示され、それ以後徐々に賛同する研究者が増加し、その範囲を拡大しつつあるが、その過程で CSR の理論的枠組みおよび CSR が包括する分野もまた多様化している。第一に看取されるのが進化心理学的視点との統合であり、CSR の想定する宗教を生み出す心的機構がいかに関進的に獲得されたかが論じられるようになる。そのことを示すのが 2011 年の米国の Institute for the Bio-Cultural Study of Religion による学術雑誌 *Religion, Brain and Behavior* の創刊である。それに加え 2010 年代には CSR の多分野化がさらに進行している。例としてマーティンは歴史学的観点を強調し、2014 年に *Journal of Cognitive Historiography* を創刊しており、また前述の 2014 年の IACSR の大会では、宗教の歴史的变化をより重視することが CSR の新展開として議論された。さらに A・テイヴスと J・サーンセンはそれぞれ「宗教体験」、「呪術」という宗教学的用語を CSR の枠組みに適合させる試みを行っており、他方で D・クンガラタスは人類学的観点を再度 CSR に持ち込んでいる<sup>(68)</sup>。

冒頭で述べたように、このような学際的分野としての CSR の誕生は宗教学の歴史において特筆すべきことだといえる。CSR は自然科学的知識と宗教研究とを結びつける点を最大の特徴とするが、それは必ずしも宗教学の「自然科学化」をもたらすわけではなく、むしろ CSR は旧来の宗教学の伝統と複合しながら、独特の発展を遂げるものと予測しうるだろう。

## 註

- (1) Cognitive science of religion の語に対しては、「宗教認知科学」の訳をあてるのが適切と考えるが、同分野を指すものとして cognitive study of religion という語も初期から存在し、これは「認知宗教学」と訳すべきであろう。どちらも CSR と略せるために、両者は交換可能なものとして用いられることもあり、このことが後述する CSR の多様化をもたらしていると考えられる。
- (2) 例としてオーフス大学は、2004 年頃から大学内の Center of Functionally Integrative Neuroscience および MINDLab、クイーンズ大学の Institute of Cognition and Culture と提携して研究を行っている。
- (3) 久保田浩「宗教学史叙述とは何か——〈ティール宗教学〉の宗教史的な文脈を手掛かりに」、『東京大学宗教学年報』第 34 号、2017 年、25 頁。
- (4) Todd Tremlin, “Evolutionary Religion Studies: Notes on a Unified Science of Religion,” in *A New Science of Religion*, ed. by Gregory W. Dawes and James Maclaurin, New York, Routledge, 2013, p. 26.
- (5) Thomas E. Lawson, “Towards a Cognitive Science of Religion,” in *Numen*, vol. 47, no. 3,

- 2000, p. 338.; Dimitris Xygalatas and William W. McCorkle Jr., “Introduction: Social Minds, Mental Cultures: Weaving Together Cognition and Culture in the Study of Religion,” in *Mental Culture: Classical Social Theory and the Cognitive Science of Religion*, ed. by Dimitris Xygalatas and William W. McCorkle Jr., Bristol, Acumen, 2013, p. 1.
- (6) Dimitris Xygalatas, “Can the Study of Religion be Scientific?” in *Chasing Down Religion: In the Sights of History and the Cognitive Sciences*, ed. by Panayotis Pachis and Donald Wiebe, Sheffield, Equinox, 2010, pp. 460-461.
- (7) Ilkka Pyysiäinen, “Introduction: Cognition and Culture in the Construction of Religion,” in *Current Approaches in the Cognitive Science of Religion*, ed. by Ilkka Pyysiäinen and Veikko Anttonen, London, Continuum, 2002, p. 3.
- (8) Uffe Schjødt and Armin W. Geertz, “The Beautiful Butterfly: On the History of and Prospects for the Cognitive Science of Religion,” in *Religion Explained? The Cognitive Science of Religion after Twenty-Five Years*, ed. by Luther H. Martin and Donald Wiebe, London, Bloomsbury Academic, 2017, p. 57.
- (9) 西ミシガン大学の比較宗教学学科には後に、同じくシカゴ大学で学んだ H・バイロン・エアハートと N・A・フォークが赴任している。
- (10) Brian C. Wilson, “A Brief Intellectual Biography of E. Thomas Lawson,” in *Religion as a Human Capacity: A Festschrift in Honor of E. Thomas Lawson*, Leiden, Brill, 2004, pp. 3-6.
- (11) E. Thomas Lawson, “Ritual as Language,” in *Religion*, vol. 6, no. 2, 1976, pp. 134-138.
- (12) E. Thomas Lawson and Robert N. McCauley, *Rethinking Religion: Connecting Cognition and Culture*, Cambridge, Cambridge University Press, 1990, p. 77.
- (13) *Ibid.*, p. 124.
- (14) *Ibid.*, p. 125.
- (15) Pascal Boyer, “Rethinking Religion: Connecting Cognition and Culture. E. Thomas Lawson and Robert N. McCauley,” in *American Anthropologist*, vol. 93, no. 4, 1991, p. 985.
- (16) Pascal Boyer, *Tradition as Truth and Communication: A Cognitive Description of Traditional Discourse*, Cambridge, Cambridge University Press, 1990, p. 10.
- (17) *Ibid.*, p. 54.
- (18) Pascal Boyer, *The Naturalness of Religious Ideas: A Cognitive Theory of Religion*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1994, pp. vii-viii.
- (19) ボイヤー以前の認知科学における宗教の扱いに関しては 3-1 節を参照。
- (20) *Ibid.*, p. 35.
- (21) Pascal Boyer, “Cognitive Constraints on Cultural Representations: Natural Ontologies and Religious Ideas,” in *Mapping the Mind: Domain Specificity in Cognition and Culture*, ed. by Lawrence A. Hirschfeld and Susan A. Gelman, Cambridge, Cambridge University Press, 1994, p. 406.



- (22) Ilkka Pyysiäinen, “Religion and the Counter-Intuitive,” in *Current Approaches in the Cognitive Science of Religion*, p. 110.
- (23) たとえば, James Laidlaw, “A Well-Disposed Social Anthropologist’s Problems with the ‘Cognitive Science of Religion,’” in *Religion, Anthropology, and Cognitive Science*, ed. by Harvey Whitehouse and James Laidlaw, Durham, Carolina Academic Press, 2007, pp. 211-246 参照。
- (24) Harvey Whitehouse, *Inside the Cult: Religious Innovation and Transmission in Papua New Guinea*, Oxford, Oxford University Press, 1995, p. 197.
- (25) Harvey Whitehouse, *Arguments and Icons: Divergent Modes of Religiosity*, Oxford, Oxford University Press, 2000, p. 99.
- (26) Ilkka Pyysiäinen, “Corrupt Doctrine and Doctrinal Revival: On the Nature and Limits of the Modes Theory,” in *Theorizing Religions Past: Archaeology, History, and Cognition*, ed. by Harvey Whitehouse and Luther H. Martin, Walnut Creek, Altamira Press, 2004, pp. 173-194.
- (27) Dan Sperber, *Explaining Culture: A Naturalistic Approach*, Oxford, Blackwell Publishers, 1996, p. 82. (ダン・スペルベル『表象は感染する——文化への自然主義的アプローチ』菅野盾樹訳, 新曜社, 2001年, 139頁。)
- (28) Maurice Bloch, “Language, Anthropology and Cognitive Science,” in *Man*, New Series, vol. 26, no. 2, 1991, p. 184.
- (29) James Laidlaw and Harvey Whitehouse, “Introduction,” in *Religion, Anthropology and Cognitive Science*, p. 9.
- (30) Sperber, *op. cit.*, p. 74. (スペルベル, 前掲書, 125頁。)
- (31) *Ibid.*, p. 95. (同書, 161頁。)
- (32) *Ibid.*, p. 92. (同書, 157頁。)
- (33) 藤井修平『『宗教現象の科学的説明』の考察——認知科学および進化生物学における理論とその背景』、『東京大学宗教学年報』第XXX号, 2012年, 103 - 119頁参照。
- (34) Lawson and McCauley, *op. cit.*, p. 175.
- (35) Harvey Whitehouse, *Modes of Religiosity: A Cognitive Theory of Religious Transmission*, Walnut Creek, Altamira Press, 2004, p. 1.
- (36) Justin L. Barrett, “In the Empirical Mode: Evidence Needed for the Modes of Religiosity Theory,” in *Mind and Religion: Psychological and Cognitive Foundations of Religiosity*, ed. by Harvey Whitehouse and Robert N. McCauley, Walnut Creek, Altamira Press, 2005, p. 123.
- (37) Justin L. Barrett and E. Thomas Lawson, “Ritual Intuitions: Cognitive Contributions to Judgments of Ritual Efficacy,” in *Journal of Cognition and Culture*, vol. 1, no. 2, 2001, p. 183.
- (38) この「特別」という語は, 「神によって特別の特性や権威を与えられている」ということを意味すると事前に被験者に説明されている。

- (39) 統計的有意とは、二つの結果の間の差が偶然に起こったとするにはあまりにも大きいことを指す用語。この場合は偶然である確率を示す p 値は.001 未満であるので、偶然にこの差が出る確率は 0.1%未満である。通例として p 値が.05 あるいは.01 未満であれば、仮説を否定する帰無仮説が棄却され、仮説を支持する合理的根拠が存在するとみなされる。
- (40) Pascal Boyer and Charles Ramble, "Cognitive Templates for Religious Concepts: Cross-Cultural Evidence for Recall of Counter-Intuitive Representations," in *Cognitive Science*, vol. 25, no. 4, 2001, p. 557.
- (41) Ibid.
- (42) Rebekah A. Richert, Harvey Whitehouse, and Emma Stewart, "Memory and Analogical Thinking in High-Arousal Rituals," in *Mind and Religion*, p. 133.
- (43) Ibid., p. 142. この場合 p 値は.05 未満であるので、.05 を基準とする最低限の有意水準は満たせている。しかし上記のボイヤーの事例と比べると、偶然にこの差が生じる確率は高いと考えられ、その点で差が見られるとは明言しづらい結果といえる。
- (44) Ibid., p. 144.
- (45) Lawson and McCauley, *op. cit.*, p. 2.
- (46) Boyer, *The Naturalness of Religious Ideas*, p. 15.
- (47) Whitehouse, *Inside the Cult*, p. 203.
- (48) Lawson and McCauley, *op. cit.*, p. 13.
- (49) Robert N. McCauley, "Is Religion a Rube Goldberg Device? Or Oh, What a Difference a Theory Makes!" in *Religion as a Human Capacity: A Festschrift in Honor of E. Thomas Lawson*, p. 64.
- (50) Justin L. Barrett, "Exploring the Natural Foundations of Religion," in *Trends in Cognitive Sciences*, vol. 4, no. 1, 2000, pp. 29-34.; Thomas E. Lawson, "Towards a Cognitive Science of Religion," pp. 338-349.
- (51) Ilkka Pyysiäinen, *How Religion Works: Towards a New Cognitive Science of Religion*, Leiden, Brill, 2001.
- (52) Jensine Andresen, "Introduction: Towards a Cognitive Science of Religion", in *Religion in Mind: Cognitive Perspectives on Religious Belief, Ritual, and Experience*, ed. by Jensine Andresen, Cambridge, Cambridge University Press, 2001, pp. 1-44.
- (53) Ibid., p. 1.
- (54) Ilkka Pyysiäinen, "Introduction: Cognition and Culture in the Construction of Religion," in *Current Approaches in the Cognitive Science of Religion*, p. 4.
- (55) Andresen, *op. cit.*, p. 23.
- (56) Harvey Whitehouse, "Twenty-Five Years of CSR: A Personal Retrospective," in *Religion Explained?*, p. 44.
- (57) Ibid., p. 47.
- (58) Justin L. Barrett, "Conclusion: On Keeping Cognitive Science of Religion Cognitive and Cultural," in *Religion Explained?*, p. 194.

- (59) Pascal Boyer, “A Reductionistic Model of Distinct Modes of Religious Transmission,” in *Mind and Religion*, p. 4.
- (60) Ilkka Pyysiäinen, “Cognition, Emotion, and Religious Experience,” in *Religion in Mind*, p. 73.
- (61) Ilkka Pyysiäinen, *Magic, Miracles, and Religion: A Scientist’s Perspective*, Walnut Creek, Altamira Press, 2004, p. xv.
- (62) *Ibid.*, p. 205.
- (63) Luther H. Martin, *Deep History, Secular Theory: Historical and Scientific Studies of Religion*, Boston, Walter de Gruyter, 2014, pp. 1-7.
- (64) *Ibid.*, p. 76.
- (65) Donald Wiebe, *The Politics of Religious Studies: The Continuing Conflict with Theology in the Academy*, Basingstoke, Macmillan, 1999, p. 155.
- (66) Justin E. Lane, “Looking Back to Look Forward: From Shannon and Turing to Lawson and McCauley to...?” in *Religion Explained?*, p. 207, n. 1.
- (67) Russell T. McCutcheon, “Everything Old Is New Again,” in *Failure and Nerve in the Academic Study of Religion: Essays in Honor of Donald Wiebe*, ed. by William E. Arnal, Willi Braun, and Russell T. McCutcheon, Sheffield, Equinox, 2012, pp. 78-94 参照。
- (68) Ann Taves, *Religious Experience Reconsidered: A Building-Block Approach to the Study of Religion and Other Special Things*, Princeton, Princeton University Press, 2009; Jesper Sørensen, *A Cognitive Theory of Magic*, Plymouth, Altamira Press, 2007; Dimitris Xygalatas, *The Burning Saints: Cognition and Culture in the Fire-Walking Rituals of the Anastenaria*, Bristol, Equinox, 2012 参照。

## The Early History of the Cognitive Science of Religion

Shuhei FUJII

The purpose of this paper is to explore the early history of the cognitive science of religion (CSR), by describing the development of its theories and its academic contributions. Over the past decade, scholarly interest in CSR has significantly increased and the field has become better recognized. Emerging within the discipline of religious studies, CSR was distinctive in its systematic methodology and its interdisciplinary nature, which led CSR to develop into a new field of study independent of the study of religion. It is worthwhile, therefore, to identify who founded CSR and how it was developed. For that purpose, the paper will describe the initial development of CSR by introducing researches and academic cooperation in the period from the 1990s to the early 2000s.

E. Thomas Lawson, Robert McCauley, Pascal Boyer, and Harvey Whitehouse published works concerning cognitive theories for the study of religion in the early 1990s. All of them applied cognitive science to the study of religion. They thought the CSR theories could be proven through experiments and therefore, conducted psychological experiments accordingly. They formed a research association, which included Justin L. Barrett, Ilkka Pyysiäinen and Luther H. Martin, who also shared the same interest. They held workshops and research conferences several times in the USA, the UK, and Finland. After some period of discussion, CSR was introduced into the academic world in the beginning of the 2000s. At that time, CSR was understood as “a scientific and explanatory endeavor that draws on findings from the various sciences of mind.”

In this way, CSR was founded; it integrates religious studies, cognitive science, anthropology, and psychology into a novel field. In recent years CSR becomes more interdisciplinary and the diversity of studies within CSR has been increasing.